
俺の異世界旅行記

心眼の虎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の異世界旅行記

【Nコード】

N5079S

【作者名】

心眼の虎

【あらすじ】

幼いころの記憶が無い主人公の「守柳 賢斗」は亜空間に飲み込まれて異世界^{デューヴァ}へと来てしまう。そこでは見たことのない生物が文明を築き暮らしていた、しかしその平和な世界に突如【マオー】と名乗る邪神の封印が解け世界中の邪悪なモンスターが暴走して各地を襲撃していた。そんな中^{デューヴァ}に来てしまった賢斗はあるエルフ族の女性と出会う、その出会いがきっかけで失った一部の記憶を思い出した賢斗はその中に「《デューヴァ》で旅をしていた記憶」があるのを知った。幼いころの記憶を取り戻すために旅へする決心をした賢斗

は「ついでに邪神【マオー】も倒せばいいな」とか適当な思い
で世界を巡るのであった。

冒険への序曲 前編！

どうしてこうなったんだ・・・

ただ幼馴染みとゲーセンに行こうとしただけなのに。

どうして異世界なんかに来ちゃったんだあああああ！！！！

ただ普通・・・じゃない生活を送っていたけども！！

別世界に言ってみたいなーとは思っていたけれども！！

本当に起こると怖いって神様！！

とりあえず冷静になれ俺・・・そして起こった事を思い出せ・・・

空間に穴が開いてそこに落ちた。

文章なら一行程度で書けるのに、ものすごくあり得ない事が起こってる。

しかも俺は以前ここに来たことがあるっていうおまけ付きだ、なのに俺はその記憶を覚えていない。

思い出そうとすると、とてつもない頭痛が起こる、何かを拒絶するかのよう。

一週間前この世界に来た日、俺はある女性に助けられた、そこで起こったある出来事が俺の記憶を思い出させた。

その女性っていうのが俺の隣でのん気に寝ているこの世界の幼馴染だったりする。

まずはこの世界に来てしまった経緯と俺の記憶が戻る原因となった事件のことを話そうか

あの日　　の前の夜に俺は不思議な夢を見た。

夢の中なのに夢だと気付いた、夢の中で夢だと気付けるのは珍しいことだろう、でも俺は今いる世界は夢だと思った。

それは夢の中なのに鮮明で少し霧がかかっていた。

その上ここに来たことがある様な気がする、分かりやすく言うと既視感 déjà vu　と言うやつだ。

そしてその夢の中には幼い頃の俺が居た。

それに・・・俺の隣に父親がいる。

夢は記憶の欠片だと聞いたことがあるけど、全く身に覚えが無い、と言うより7歳以前の記憶が無い。

俺は両親を数年前に亡くした、医学的にはそのショックで記憶を失ってしまったと言われた。

そう考えていると目の前に少女が現れ、幼い頃の俺に近づいて何かを言おうとした時

《ピピピピピピピピ》

目覚ましが鳴り俺は目が覚めた。

時計を見ると朝6時。

(さっきの夢は一体・・・?)

そう思いながらも俺は弁当と朝食を作りキッチンへと向かった

トントンとリズム良く食材を切っていく

何故俺が弁当と朝食を作っているかと言うと、現在俺の保護者である親戚の天田夫婦あまたは海外出張で家に居なく、天田夫婦の娘で俺の従姉の唯さんゆい（通称唯姉ゆいねえ）は料理の腕は凄いけどもめんどくさがって全く料理をしない。唯姉の妹の葉月はつきは食べる物を食べなくする驚異テス・マターのえ？これ食べるの？と言う能力保持者なので一人で料理させることを禁じているので結果的に俺が料理しなければならぬ。作った料理を弁当に詰めていく、すると葉月が起きてきた。

「おはよー」

「おはよう、朝ごはんすぐに作るから待ってる」

「はい」

急いで料理を詰めて、朝食を作り始めた

「朝食出来たぞー」

「うにゅ……」

「あれ？唯姉は？」

「まだ寝てると思うよ」

時間は……7時半……

「起こしに行くしかねえのか……」

「頑張れっお兄ちゃん！」

唯姉を起こしに行くのは気が滅入る。

何故なら起こそうとすると抱き付いてくる……フルパワーで。

唯姉は柔道や空手などの武術を習っていたためにフルパワーで来られると正直唯姉と男の俺でもきつい、ちなみに唯姉のフルパワーは瓦20枚くらいは簡単に割れる程度だ。

ガチャ

「唯姉もう7時半だよー」

「んう・・・」

「早く起きないと遅刻するよー」

「あと五分だけ・・・」

あと五分言う人間ほどそう早くは起きない、俺はふと頭の中にある言葉が浮かんだ、試しにその単語を唯姉の耳元でそっとささやく。

「減給」

「うわあああああああ!?!」

「こっかにはばつぐんのようにだ!!」

「起きた?」

「今何時だっ」

「7時32分だよ」

「早く着替えないと遅刻してしまう!」

「そうだと思ってサンドウィッチにしておいたから」

「すまない!」

俺は唯姉の部屋から出てリビングへと向かった。

今日は7月21日土曜日だ、唯姉は仕事へ行かなければならない、葉月はクラブで大会らしい。

俺は自室に戻り私服に着替えに行った

着替えている時ふと気付いた。

(あ、そうだー弁当渡してなかったな)
俺はリビングへ急いで戻った

リビングに急いで戻ったものの唯姉だけで葉月の姿はない。

「唯姉、葉月は？」

「今さつき出て行ったけど、それがどうした？」

「あー、弁当渡し損ねた・・・」

「そうか、なら中央グラウンドへ行けそこでソフトボールの試合があるらしい。」

「遠いな・・・」

「私と今日一日雑務をこなしてくれるのなら車で」

「断る」

「でも今からじゃ」

「断る」

「でもで」

「断る」

唯姉は俺の在学している学校の教師だ、教師に身内が居るのは結構気まずかったりする、なのにそんな事おかまい無しで学校で一緒に居たがる、それに俺は今絶賛不登校中だ。

「まだ何も言っていないのに・・・」

「何年一緒に住んでると思ってるの？ 大体の発言や思想なら予想できるよ」

「え？じゃあ私の考えはすべて賢君に筒ぬけなのか・・・照れてしまっな・・・」

「じゃあ、これ唯姉の弁当ね、葉月に弁当を届けに行ってきたーす」
唯姉が変な世界に行ってしまったので俺はスルーして弁当を届けに行った

「これが分かるとは……」
「と言うか葉月ちゃんのお兄さんですよ、何でこんなところ？」
「ああ、渡し忘れた弁当をな……」
「お優しいですね」
「まあ、妹だしな」
「忘れたお弁当を届けてくれる兄は賢斗けんとさんくらいですよ」
「そうか？」
「そうですよ」
そんな風に話していると
「佳奈ー何してるのー？ 次佳奈の番だよー？」
「やばっ、急がなきゃ」
ここからベンチまで結構遠い、ここで引き止めてしまった詫びに
送ってあげようと俺は彼女をお姫様だっことにした。
「何してるんですか!？」
「しっかりつかまってる」
「え!?!え!?!」
俺は全力で走った

約10秒でベンチについた。
「とうちゃーく」
「あ、お兄ちゃん……に佳奈何してるの？」
「もっ……もういいですっ!降ろしてくださいっ!」
「ああ、すまん」
割れ物のシールが貼られている段ボールくらい優しく降ろした。
「で……佳奈……弁明はしないのかな？」
葉月は完璧な笑顔だ、完璧すぎてそれは笑顔では無く作り笑顔だと100%認識出来るくらい完璧だ。
「え……? マジで怒ってる? 助けてー賢斗さあーん!」

葉月の完璧な作り笑顔に怯えている佳奈ちゃんは、俺の方を助けを求めるかのように俺の名前を叫んだ。見ているのもかわいそうなくらい怯えているので俺は助け船を出した。

「そこまでだ葉月、佳奈ちゃん今からバツティングなんだから」

「あ・・そう言えば！！ちよつと行ってきます！！」

そう言ってヘルメットとグローブをつけてバツティングゾーンへと駆けて行った。

完全に忘れてたな・・・あの反応は・・・

佳奈ちゃんが行った後にチームメイトの子達の方から話し声が聞こえた。

「あの人ってまさか」

「そうだよ 死神 だよ」

「・・・聞こえてるっつーの。」

俺はこの辺の人たちに嫌われている、何故ならば俺に近づく人はことごとく不幸が訪れる。そのために 不幸を呼ぶ死神 と呼ばれている。

その話気付いた葉月は強引に話題を変えた。

「そう言えば何でこんなところに？」

「ああ、お前に弁当を渡しそびれてな」

「そういえば・・・」

「と言う訳で、はい」

「ありがとー」

「用も済んだし帰るかな」

「もう帰っちゃおうの？」

葉月は今にも泣きそうな顔をした、女の子の涙は嫌いだ特に身内と幼馴染のは見たくない・・・だから俺はこう言った。

「帰ってもすること無いから見ていくよ」

まわりのチームメイトの子達から『早く帰れ』的な視線がビシビシ突き刺さってくるが俺は無視して葉月の横に座った。

「やったー」

野球は見るよりする方が好きなんだけどなー

佳奈ちゃんはこのチームのキャプテンである、そしてここら辺では有名なバッターで知らない人はあまり居ない。

そして相手のピッチャーもかなり有名な子だけど・・・ん？
が小刻みに震えている。そうか怯えているんだな、相手はあの不^ズ死^スの打者^{バッター} だしな。

この名前の由来は打率がかなり高いためにアウト（死球）知らずのバッターって事で葉月に頼まれて高二病真っ盛りの俺が作った二つ名だ、本人は結構気に入ってるようだ。

「ピッチャービビってるー！」

俺がそう野次を飛ばすと葉月がピクツと反応した後、繋げるかのようにこう言い放った。

「HEY！ HEY！」

このネタが分かるのは、俺と葉月しか分からないらしい、何で葉月は知っているんだろうね・・・

「ピッチャービビってるー！」

「HEY！ HEY！」

「かましたれ！ HEY！」

「かましたれ！ HEY！」

『かーまーしーたーれー！！』

息が合いますぎだる俺達（笑）

一通り済ました俺と葉月は無意味のハイタッチをかわし

カキイイイイイイ

ている時に耳に心地よい音が響いた。

「おおー流石佳奈ちゃんホームランだー」

満塁だったために4点も点が入った。

「ゲームセットー！！」

『ありがとうございましたー』

俺が来た時にはもう5回の裏でコールドだったらしい、もちろん勝ったのは葉月と佳奈ちゃんの所属する本町サンデーズだ。

「私たち午後も試合があるからお兄ちゃんは先に帰ってて」

「オツケー寄り道せずに早めに帰ってこいよー」

「はーい」

結局帰りも全力で50分走った

「ただいまー」

誰も居ないと分かっているながらもつい言ってしまっ。キッチンまで行き冷蔵庫の中を見してみる。

「これだったらチャーハンが作れるな……」

俺は手際良くチャーハンを作ってそれを食べ始めた。

ピンポーン

「んぐ？」

俺が飯食っている途中に来るやつはあいつしかいない。

渋々俺は玄関へと行きドアを開けた。

ガチャ

「やつほー、今日もゴチになりに来たよー」

「見なかったことにしよう……」

ガチ

閉めようとした寸前にドアの隙間に靴を挟まれた。

「待ってーお腹すいたよー」

「なんだよ霞おめえに食わせるチャーハンは無いぞ」

こいつは 如月 霞 俺の幼馴染で趣味に共通点が多く仲がいい。

あと何故か休日は必ずうちに昼飯を食いに来る、自分で作れねえのかこいつ……

「今日はチャーハンかー」

「聞いてんのか？」

「ん？なんの事？」

こいつにはもう俺の作ったチャーハンのことしか無いらしい……それに玄関先でこんなやり取りしてたらご近所さんに怪しがられるかもしれない……

「……もういい……入れ……」

俺は妥協した……

「わーい」

ガチャ

「いいにおーい」

フライパンに残っていたチャーハンをすべてのせた皿を霞の前に置く。

目をキラキラさせながら待っていた霞はチャーハンののっている皿に釘づけた。

「……よだれ垂れてますよー」

「ほらよ、食え」

「いっただつきまーす」

まさにガツガツと言う擬音が合う食べっぷりだ。

こいつは俺の作ったどんなものでもうまそうに食べる。

子供が自分の作った飯を食べてるのを見てる親ってこんな感じなんだろうな。

そう眺めていると霞がチャーハンを食べながら俺に話しかけてきた。

「もぐもぐ・・・そう言えば・・・もぐもぐ・・・この後・・・ゴクッ、ゲ
ーセン行かない？」

「別にいいぞー」

そう言えば新しい射ゲーが出たはずだからちよつど行きたいところだった。

「食い終わったら荷物を持って玄関の前にこい」

「うん・・・ごちそうさまー」

食器を片づけた俺は荷物を持って俺の家の玄関前で霞を待った

女子の準備って結構時間がかかる、それは俺だって分かっているつもりだ。

でも40分は待たせ過ぎじゃねえか？

「遅い・・・」

そう愚痴を言いながらも霞を待った、すると

ピキッ

後ろからガラスにひびが入ったような音がした。
振り返ると・・・

何もないただの空間にひびが入っていた。

どどんひびは大きくなりそして・・・

割れた。

その所為^{せい}で俺の足元までひびが入って

「え？ちよ・・・まさか!？」

穴が開いた。

「やっぱりかああああ!!！」

ガシッ

俺はふちに掴まり落ちるのをまぬがれた。状況的にまさに崖っぶちだ。

・・・それほどうまくことを言えてないな。

するとタイミングのいいところに霞がやってきた。

「霞っ助けてくれっ!!！」

さっきの服装とは違いフリルのついた可愛い服を着ていた。

それに若干髪が濡れてる・・・風呂に入ってたのかコイツ!

「何してるの賢斗!?!早く掴まって!!！」

霞は腕を伸ばして俺の手を掴もうとした。

これは運命の悪戯^{いたずら}って奴だろうか・・・

霞が俺の腕を掴もうとした瞬間、俺の掴まっていたふちが崩れた。

「霞iiiiiiiiiiii!!！」

俺は何かにすぎるように叫んだ、叫んだところで助かったりするわけでもなく意味はない。

どんどん落ちていく。

(すげえ深いな・・・底ってあるのか?)

そんな素朴な疑問が脳裏をよぎった

〜10分後〜

落ちていくにつれて恐怖心が無くなり今では風が心地いい!

・・・それにしても暇だな。

こつも落ちてるとスリルも何にも感じない。

俺は暇なあまりスカイダイビングのように体を回転させたりして遊び始めた

〜1時間後〜

全く底らしきところにつかない、というか何だこれス〇イ・キッズあたりでこんな感じの状況のシーンがあった気がする。

「このまま落ち続けて生涯を終えるのかな・・・」

そんな不吉なことを言った瞬間、落ちている方向の先に光が見えた。

つづく

冒険への序曲 前編！（後書き）

はいどうも、心眼です

この話は俺が生み出した一番最初のストーリーです

第一話なのに前編と後編に分かれるほど長いです（笑）

まだまだ未熟なところもありますがつづきをお楽しみに！

完

いや、まだ続くだろう、ここで終わったら前編だけが妙に長い物語になっちまう。

次に目が覚める事の無いと思っていたが俺は見知らぬ家の中で目覚めた。

目線の先には見知らぬ天井があった。

「こ・・・ここは・・・？」

「目覚めたか」

横を見ると凜とした顔立ちの女性が座っていた。

今、気が付いたが俺はベットで寝ていたようだ。

「あれ・・・？俺確か頭から落ちたはずなのに何で無傷なんだ・・・？」

あの高さから落ちたのに無傷、奇跡と言わざるを得ない。

「私が貴方を見つけた時は気絶していただけだった」

「何はともあれ、助けてくれてありがとう」

「うむ、助けが必要な者には手を差し伸べよと教わったのでな」

地球にこんな人達で溢れていたなら居たら戦争なんて起こらなかつたろうな。

「で、ここはどこなんだ？」

「ここはフェリス王国最西部の村、スィーヴァ村だ」

「ふえりすおーこく？」

どっかにそんな国あったっけ？

「貴方はどこから来たのだ？」

「日本って国だ」

「!？」

「どうかしたか？」

急に真剣な顔つきになって考え始めた

数秒後、彼女はある結論を出して、俺にこう言った。

「貴方はこの世界の者ではない」

「ナンダッテリーー!？」

どつりで見知らぬ土地なわけだ。

「どうやってここに来たんだ？ 教えてくれないか!！」

なんで興味深々なんだ。

「分かったから落ちついてくれ」

聞いたところでどうするんだよ。

しかし、別に隠す理由もないので今までの経緯を話すことにした

「ふむ、それはとても興味深いな」

俺のあり得ないような体験の話を実剣に聞いてくれた。

「正直あり得ないんだけどな」

「否、貴方がここへ来たということは、あり得るといふことだ」

そりゃそうだけど・・・

「ならここは俺の世界の言葉で言うと並行世界パラレルワールドって事になるのか？」

「簡単に言うとそうなるな」

もしかして俺、時空を越えたのかよ。

「となると帰り方が分からないな」

「そこまでは分からないが、王国首都にある国立図書館に行けば何か手がかりがあるかもしれない」

国立つて言うぐらいだしでつかいんだろっなー。

読書好きな俺は胸を高ぶらせざるを得ない。

「首都ってどこにあるんだ？」

「ちよっと待っていてくれ、地図を持ってくる」

そう言つて彼女は地図を持ってきてかけ布団の上に広げた。

「ここがフェリス王国のあるコルブス大陸だ、そしてこれがスイーヴア村、そしてここが首都のウディウスだ」

地図には見たこと無い大陸や島々が描かれていた、その中でスイーヴア村とウディウスは正反対の位置にあり20？くらい離れていた。

「大体何日くらいかかるんだ？」

「そうだな、馬車で約21日・徒歩だと約43日はかかる」

「そうか・・・」

でも、俺一人で行けるのかどうか・・・

どうするか考えていると、彼女が急に問いかけてきた。

「そう言えばまだ貴方の名前を聞いていなかったな」

そう言えばまだ名前を言つてなかった。

しかし、俺はこう言い返した。

「相手の名前を聞くときはまず自分の名前を言うべきじゃないか？」

「それもそうだな、私の名は シルフィン・フォレンド・エルクス

、森の巫女の末裔だ」

「森の巫女？」

「そうか、貴方はこの世界の伝説を知らないのだな」

「伝説なんてものがあんのか」

「ああ、貴方に伝説について話してやろう」

「・・・頼む」

今から約3000万年前、世界は マオー と名乗る邪神によって支配されていた。

その時、 異世界の渡り人 と名乗る男と、その男の従者の7人の女達によつて封印された。

女達はそれぞれ、 森の巫女 獣の首領 闇の女帝

天の王族 海の統治者 砂漠の侍 機甲の管理者

と名乗った。

そして、またいつか世界が闇に飲まれそうになるとき、いつかまた我が子孫が 異世界の渡り人 となつて世界を救いに来るだろう、と言ひ残しこの世界を去つて行つた

「これがこの世界の伝説だ」

「これは本当の出来事なのか？」

「私という存在が居る限りこのことは本当の出来事だろう」

「なんでだ？」

「貴方と話せているのは、森の巫女の血を継いでいるからだ」

「要するに、7人の女達のいずれかの血を継いでいるとどんな言葉でも話せるのか」

「簡単に言つとそうなる」

翻訳機能標準装備か、すげえ便利だな。

そう話していると、玄関らしきところのドアが開いた。

「シルフィンちゃん、あの人起きた？」

そこから現れたのは20代くらいに見える女性。

「はい、怪我もなくいたつて健康です」

「あら、起きてるじゃない、まさかお邪魔だったかしら？」

「そんな事はありません」

なにこの定番のやり取り。

「貴方、なかなか良い男じゃない」

そう言つて近づいてくる。

「止めてください、そして布団から降りて下さい。重いです」

「そんなこと無いわよ、失礼しちゃうわね」

あれ？

「冗談ですよ冗談、こんなに美しい方が重いわけないじゃないですか」

「あら、お世辞が上手なのね」

あれれ？

「何かご用ですか？」

「ううん、何にも無いよ様子見に来ただけ」

「ではもうご用は済みましたね」

「もう、シルフィンちゃんは固いんだから、じゃあね」

嵐のように来て、嵐のように過ぎ去った。

「……俺の言葉通じてたよな」

「……」

空気が重くなった……

「そっそんな事より、貴方の名前を聞かせてもらおう」

ひよったな。

「俺の名前は

ドゴオオオオオオオン！！

名前を言おうとした時ものすごい音が聞こえた。

「まさか、モンスターか！？」

「モンスター！？」

俺とルフィンは急いで表にでた。

目の前に広がるのは

数十秒前は家だった残骸の山。

幸い死人は出ていないようだ。

「自律石像だど！？ こいつらの出現区域はもっと北東のはずなの
ゴレム」

に!？」

ゴーレムと呼ばれたモンスターは、ドラ○エに出てくような形ではなく騎士の様な形をしている。

体長は目測で2mぐらい、武器は石の剣らしきもの。

「くっ……武器召喚!!」

そう彼女が言つと光の粒子が手に弓の形を形成していき弓が現れた。

「君が戦うのか……？」

「そうだ、この村で戦いの知識があるのは私だけだからな」

「そんな!!他に男の人とかは居ないのか!？」

「この村には男は居ない」

衝撃の真実がっ!!

「と言うよりこの世界には男性は一割しかない」

ええええええええええええええええ!!

10人に1人の割合かよ!!

「貴方は逃げてくれ、戦闘の邪魔だ」

「でも女の子一人を置いて逃げるなんて!!」

「早くしろ!!」

俺だつて早く逃げたいさ、でも女の子一人置いていけない。

でも戦いに参加したところで引きこもりの力なんてたかが知れている。

でもっ……でもっ……!!

「俺だつて男だ!!」

死を覚悟したその時

ズキッ

急に激しい頭痛が襲ってきた。

「痛……い……頭が……割れ……る……」

こんな……に……激し……い、頭痛は初……めてだ……

「何をしているんだ！！早く逃げろ！！」
目の・・・前の景・・・色が歪ん・・・で見える・・・
風・・・の音・・・足・・・音・・・声がど・・・んどん・・・遠く・・・なって・・・
いく・・・

カチャッ

頭の中で鍵の開く音がした、

そして、

パズルの1ピースが記憶の一部にはまった

思い出した。

すべてとはいかないが、一部分だけを

「はああああああ！！！」

俺は気が付くと自律石像ゴレムに向かって走っていた。

「よせ少年！！貴方の力じゃ自律石像ゴレムは倒せない！！！」

そう言われて俺は立ち止った。

「少年？　そう言えば 森エルフの番人 は生まれてから5年で成人と変わらない容姿になるくらい成長が早いんだったな」

俺は当然のようにこの世界の常識を語った。

「なんで話してもないのに貴方は知ってるんだ・・・？」

「そりゃあ、俺は 異世界の渡り人 だからな」

「え・・・？」

「自己紹介がまだだったな。俺の名は 守柳しゅりゅう 賢斗けんた。そして 異世界の渡り人 の末裔だ」

「まさか・・・おにい・・・ちゃん？」

「久しぶりだなシャル、昔と随分変わったな」

俺は昔シャルとあったことがある、シャルと言つのは俺だけが使う愛称だ。

目線の先にいる自律石像ゴレムに俺は拳をかまえて

一瞬で自律人形ゴレムの前に移動し、拳に力を込めた。

「闘獣拳 鎧通し術 一ノ型 一角ニココーン ！！」

ドゴオオオオオオオン！！

俺の腕が身体と自律人形ゴレムの弱点である結晶コアを貫通していた。

「まずは一体……」
腕を抜くと俺は自律石像ゴレムを数え始めた。

敵の数は3体、一体倒したからあと2体。
2体目の自律人形ゴレムを探していると

「きゃあああああああ！！」

悲鳴が聞こえたその先には、なんとさつきシャルの家に来た女性ゴレムが自律人形ゴレムに襲われていた。

自律人形ゴレムは剣を振りかざしていた、何というグッドタイミング。

「間に合うか！？」

そう言つと、背後から矢が飛んできて自律人形ゴレムの手の甲を貫通した。

後ろを振り返るとシャルが弓矢をかまえていた。あいつ、腕を上げたな……

シャルが手を潰したおかげでスキが出来た。

「チャンス！！」

俺はスキを逃さず攻撃した。

「喰らえ・・・守柳体術 蹴り技奥義 ムーンサルト 三日月蹴り ！！」

俺は剣を振り上げてのけぞっている自律人形の胸に飛び、オーバーヘッドをする要領で自律人形の頭を蹴りあげた。

ドゴオツ！！

そう音を立てて頭にあった結晶ごと崩れ落ちる。

自律人形の結晶は個体ごとに違う位置にあるのだが、何故か俺には手に取るように結晶の位置が分かった。

俺は自律人形に襲われていた女性に手を差し伸べる。

「大丈夫ですか!？」

「あら、貴方はシルフィンちゃんのところの・・・」

「その話は後でしますから早く避難を」

「そうね、あとは貴方に任せるわよ」

「任せて下さい」

あと一体・・・でもその最後の一体が見当たらない。

「シャル、最後の自律人形はどこへ行っただんだ？」

「分かんないよおにいちゃん」

シャルのやつ急に口調が変わったな。

「そうか・・・逃げたのかもしれないな」

「そうだね」

「なら帰るとするか」

「うん、そうしようか」

帰ろうとした時、

ドゴオオオオオオオオオオ！！

背後から最後の自律石像が現れた。

・・・しまった！！

最後の最後に油断をしてしまった。

しかもシャルに向かって剣を振り降ろしている。

俺は咄嗟とっさにシャルを、

庇かばった。

ゴスツ

本日二度目の衝撃を後頭部に喰らいながら俺は技を放った。

「守柳流 手刀術 居合斬 ！！」

シュツ！！

手刀が空気を切る音がなりその直後に自律人形ゴーレムが真っ二つに割れた。

そして俺はその場に崩れるように倒れた

気絶している中、俺は昔のことを夢に見た。

父と初めてこの世界に来た時スィーヴァ村を一時期だけ拠点にしていたことがある。

その時にシャルと出会った。

最初にあつた時はシャルは2歳だった。

しかし見た目は自分と同じく5歳くらいだった。

それからシャルと四季を過ごした。

しかし、出会いがあれば必ず別れがある。

スィーヴァ村に滞在して1年経ったある日、別れが来た。

シャルは泣いて俺の服の裾を離さなかった。

その時、俺はシャルとある約束をした。

世界中の旅をし終えたらこの村に戻ってくる と・・・

しかしその約束はあのととき果たせなかった。
それが心残りだった……

目を開けると幼いころに見慣れた天井があった。

「いつつ……」

頭に触ると包帯が巻かれていた。

「起きた？おにいちゃん」

横を見ると凜と顔つきながらも少女の様な笑顔を見せているシャルが居た。

「最初と全く口調が違うな」

「それは言っちゃダメだよ！！」

やはり地雷^{タップ}だったか。

そんな事を話しているとドアの隙間から誰かが顔を出していた。

「あら？お邪魔だった？」

ドアから顔をだしてこつちを眺めていたのはあの時の女性だった。

「いえ、そんなことは無いです」

一瞬で元の口調に戻ってるし。

「でも、おねーさんにはすべてお見通しだぞ？」

お見通して……ああさっきのシャルを見ていたのか。

「まさか、シルフィンちゃんが可愛くなっちゃうなんて、貴方のおかけかしら」

「ふふっ、それはどうでしょうかね」

「か……可愛いつていうな！！」

「ところで何をしにきたんですか？」

「んー？ えつとね、おねーさん君のこと気に入っちゃった？」

そう言っただけに抱きついてきた。

「おにいちゃんを離して下さい！！」

シャルも負けじと俺に抱きついてきた、お前まで抱きついてどう

する。

そんな中、俺は二人に言った。

「あのさ・・・二人とも・・・胸当たってんだけど・・・」

そう言っていると、シャルは耳まで顔を真っ赤にし、おねーさんの方はより強く抱きついてきた。

「やべえ・・・状況を悪化させちまった・・・」

「ほらほら、柔らかいでしょ？」

「離れてもらえませんか？」

「あら、無反応？おねーさんの色仕掛けが効かないなんて貴方で二人目よ？」

「家族で似たような事してくる人がいましたね」

もちろん唯姉のことだ。

「ところで貴方は？」

「あら、自己紹介まだだったかしら？」

そう言つとおねーさんはコホンと咳払いをして自己紹介を始めた。
「私は セシル・マーシャル、最近首都からこっちに引越してきたのよ」

「俺は守柳 賢斗。異世界の渡り人の末裔だ」

「異世界の渡り人ってあの伝説の！？」

「そういうことだ」

やはり俺の正体を明かすと驚くらしい、今後は必要な場面以外言わない事にしよう。

「ますます気に入っちゃったわ？」

再度俺に抱きつくセシル・・・

「だから、おにいちゃんに抱きつかないでください！！」

この後も二人の美女に引張られ続けた

「あー、両腕が痛い・・・」

あれから日が落ちるまで美女二人に腕を引つ張られ続けた俺は夜風を身に当てに外にいた。

俺は時空の穴に落ちた際、一緒に持ってきた鞆かばんの中にあつたお気に入りのおカリナを村全体に響かせるように吹き始めた。

名を知らない曲を淡々とただ奏かなで続ける。

「ほっほっほ、良い曲じゃのお」

「これは長老様」

いつの間にかこの村の長老が座っていた。

「ほっほっほ、村を救ってくれてありがとう」

「いえ、当然のことをしたまでです」

「これからお主はどうするのじゃ？」

「そうですね旅に出ようかと思えます」

「ほっほっほ、そうかいそうかい」

「実はですね、俺幼いころの記憶がないんですよね」

「なんと!？」

「でもですね、自律石像ゴレムと戦う際に一部だけ……一部だけ記憶を思い出したんですよ、もしかしたら旅をしたら他の記憶が戻ってくるかもしれません」

「ほっほっほ、ではこれを渡すときじゃな」

長老の手には刀が握られていた。

「それはまさか!？」

見覚えがある、それは父がいつも腰に下げていた刀だった。

「ほっほっほ、これをお主の父にお主が来たら渡してくれと頼まれていたのじゃよ」

父が……ということとは、ここに来ることは偶然ではなく必然の出来事だったってことか。

刀を渡され、俺は鞘から刀を抜く、鞘から青みを帯びた刀身が姿を現す。

「古来の伝説の鍛冶人 虎徹 が造ったとされる最高傑作 蒼虎徹
か・・・」

「この剣は少し特殊な剣だ、使いこなせるかどうか・・・
あとこれも持っていくがいい」

「そう言っただけ渡されたのはシヨルダーバック。

その中にはカードの様なものが入っていた。

「これは封印札（ジェイライド）、さまざまな物を入れられる札じゃ」

昔、父に聞いたことがある。

確かポイポ○カプセルとかモンス○ーボール的なものだった気がする。

「このカードも持っていきい」

「そう渡されたのは三枚のジェイライド、さっきのは絵柄がなかったが、今渡されたカードには保存のきく干し肉、パン、そして金貨の絵柄の入っていた。

「これに何かを入れるときは封印（ラ・ビュレ）、何かを出すときは解放（レ・デュレン）と唱えよ」

「ありがとうございます、長老様」

「お主は自分の能力のことは思い出したかい？」

俺の・・・能力・・・

「はい、基礎の魔法、剣術、武術、あと自分のことを思い出しました」

「ほっほっほ、上出来じゃ」

「もう俺は寝ますのでここらへんで・・・」

「そうじゃの、ではおいとまするかの」

「そう言っただけ長老様は去って行った。

明日の為に早く寝るか

シャルの家に戻ったが。

ベッドはちゃんと二つあるのだが。

なんで俺のベッドにシャルが居るんでしょーね？

いや、まだそれは良いとして、セシルもいるってのはどーゆーことでしょうね？

「おい、二人とも起きろー」

「むにゃ．．むにゃ．．」

夕又キ寝入りをかましてやがる．．．

俺はそれを無視して昔よく登っていた大樹のところへ行き、その枝で一夜を過ごした

大樹の枝の上で一夜を過ごした俺はシャルの家に帰り、玄関を開けると．．．仁王立ちしたシャルが居た。

「昨夜はどこに行ってたの!？」

まあこうなるわな．．．

「だったら一人で寝かせろ」

「昔は一緒に! って．．．その荷物何？」

「ああ、旅に出ようかと思ってな」

「え．．．また行っちゃうの？」

「記憶を取り戻すためにな」

「じゃあ私も連れてって!！」

「うん、いいぞ」

「そっか．．やっぱり無理だよねって、ええええええええ!？」

「どうかしたか？」

「いいの!？」

「ああ、むしろ連れて行くかと思ってたんだけど」

「え．．．あ．．．そう．．．そうなんだ．．．」

シャルはうつむいてぼそぼそと何かを言い始めた。

「じゃあおねーさんもついていこうかしら」

背後からセシルが現れた。

「あら？ 驚かないのね」

「気配で分かりますよ」
「なんでセシルまでついてくるんだ!!」
「やっぱり元の言葉使いに戻る、謎だ。」
「あら?なんでついていつちや駄目なの?」
「私とおにいちゃん、二人でいくんだ!!」
「別にいいじゃないか、旅は多い方が楽しいって聞いたことあるしな」
「流石ね、それに私には首都に友人が居るからいろいろと役に立つわよ?」
「それならなおさらだな」
「そうか……」
何故かシャルがうなだれていた。
「二人とも30秒で支度をしろ!!」
どこかで聞いたことがある台詞だ、きっと既視感デジャヴだろう。
「私はもう支度は出来てるけど」
「私も出来ている」
俺の行動が読まれている……だと!?
待つ手間が省けたからいいけどさ……
「そんじゃ行くか」
シャルの家を出て俺たちは村の出入り口へと歩きだす。
早朝の為人はいない。
「ほっほっほ、達者での」
村の出入り口のところにいるの間にか長老様が居た。
「お世話になりました」
そう長老に礼を言い、村を背に俺達は首都ウディウスに向かって歩き出した。
遠くに見える山から少しずつ太陽が登り始めていた。

冒険への序曲 後編！（後書き）

疲れた・・・長かった、とてつもなく長かった。
でもまだ続く、まだ続きちゃうんですWWW
あー寝る、もう寝る、絶対に寝る！！！！

雨の日にて・・・

村を出てから約12時間、太陽は西に傾き東から闇夜が迫りつつある、それと東の方に黒雲があるがいまだ晴れている。

この大陸は気候が温暖で自然が多く様々な形をしたモンスターが多い。

しかし、特に遭遇エンカウトもせず、順調に首都へと向かっていた。

「ねえおにいちゃんの能力ってどんなの？」

唐突にそう聞いてきた。

しかも何でシャルは俺に話しかけるときだけ口調が変わるかね？俺にはわからないよ。

「お前の能力はどんなのなんだ？」

秘儀質問返しっ！！

「え？私のは 導きの光 だよ」

でかい胸を張って誇らしげに言う。

「ミラーシユ・ヴァル 導きの光 か、良い能力だな」

ミラーシユ・ヴァル 導きの光、色々な特性の光を自由に操れる操作系の能力、昔 森の巫女 が使っていたらしい。

「ねえその能力ってなに？お姉さんよく分からないんだけど」

「伝説の中に言い伝えられていないみたいだな」

「そうね、そう言ったものは聞いた事がないわね」

「そうか、なら話してやろう」

そう言ってシャルはコホンと咳払いをした。

俺の役目を盗られた気がする・・・

「お願いするわね」

「異世界の渡り人とその従者である六人の女達にはそれぞれ特殊な

能力と相棒トレッサーを持っていたらしい」

「で、シャルは導きの光ミラーシユ・ヴァル、俺は万物の創造主クリエイターだ」

「くりえいたー？」

シャルとセシルが首をかしげる。

息ぴったりですね。

「つまりだな・・・」

俺は二人の目の前に手のひらを出した。

「？」

二人は不思議そうな顔をしてまた首をかしげる。

また息ぴったりですね。

「何が起ころの？」

「今に分かる」

俺は瞼まぶたを閉じて

想像を始めた。

想像が鮮明なほど完成度は高くなる。

そして

「完成した」

「え？」

俺の言葉の意味が分からないという感じにまた首をかしげる。
するとお手の手のひらの上に粒子が集まって

リングが手のひらで形成された。

「おおー」

驚きに満ちた目でリングに目を向ける。

俺はそれを一口かじる。

「うん、うまい」

「おにいちゃんすごい!!」

「なんでも創ることが出来るの?」

「ああ、この世に無い物も創れるぞ」

「便利な能力ね」

そう話していると・・・

ピチヨッ

俺の頬に冷たい物が当たった、まさか・・・

ザアアアアアアアアツ

・・・予想通り雨が降ってきた。

「やばいつ、二人とも走れっ」

雨宿りが出来るところを探しながら走っていく。
すると偶然洞窟を見つけた。

「あそこに入るぞ!!」

急いで洞窟へ入ると俺は能力でタオルを創りだした。

「ほらよ」

それをシャルとセシルの頭にタオルを被せる。

「ありがとう」

「感謝するわ」

礼を言うと二人はタオルで頭を拭いていく、俺も同じく頭を拭いていると。

「ニヤア」

と鳴き声がした。

後ろを振り向くと灰色の毛の猫がいた。

俺達と同じく雨が降ってきたのでここへ逃げ込んだらしく雨で濡れている。

「ほら、こっちへこい」

俺がそう話しかけると近づいてきた。

流石に動物とは話せないらしい、どつという基準なんだ？

そう思いながらも俺は猫をタオルでくるむとそのまま身体を拭いていった。

「ニヤアー」と気持ち良さそうに目を細める。

「あらキャニヤット？この辺では珍しいわね」

この世界では猫のことをキャニヤットと呼ぶ、ちなみに犬はドッキングと呼ぶ。

「そうなのか？」

「ええ、本来は首都周辺にいるはずよ？」

「じゃあ迷い込んだできたのか？」

「そうかもしれないわね」

それじゃあ野良なのか・・・そうだ！

「じゃあ、俺こいつ飼うわ」

「ふふつ、おにいちゃんらしいね」

昔、俺はシャルと村周辺の森でよく遊んでいた、その際に迷子やけがをした動物たちを保護したりしていた記憶がある。

「ちゃんと飼えるの？」

そう不安そうにセシルが言った。

「大丈夫だ、実は俺昔キャニヤットを拾って飼ってた記憶があるし」

「懐かしいねーおにいちゃんが怪我した子供のキャニヤットとウオルフを拾ってきたんだよね」

「ああ、思い出した記憶の中にその記憶があつた」

ウオルフっていうのは狼のことだ、当時はかなり希少性が高くて遭遇できないことで有名で、しかも生息地はもつと北の方だったはず。なのに何であんなところに・・・

そう考えているとシャルが「ねえねえ」と俺の身体を揺さぶって

バンバンとシャルが自分の隣をたたく。

「俺はここで番をするから、すまんが一緒には寝てやれないな」
万が一という場合がある、気は抜けない。

「ええー……」

「また今度な」

がつくりとシャルはうなだれた

雨が降り始めてから何時間経ったのだろうか、時計などないので
時間なんて分からない。

「ニヤア」

ミュテが外を見ていた俺に近づいてきた。

俺はミュテを抱きかかえ、外を眺めた。

「なんか懐かしい気がするな」

昔、こんなことをした気がする、既視感デジャヴというやつだ。

「お前と話せたらいいのになー……あ」

今思ったけど俺の能力で能力を作ることができるんじゃない……

「すこし待つてろ」

そう言っただけ抱きかかえていたミュテを下した。

そして目をつむり想像を始める。

想像しろ、ただ自分の思うままに

想像を一通り済ませた俺は目を開ける。

「あーあー能力のテスト中、俺の声聞こえるか？」

ミュテにそう話かける、はたから見ると危ない人だな。

などと考えていると

「ああ、聞こえているぞ、と言っても通じないと思うけどな……」

「お、通じた通じた」
「ええええええええええ！？通じちゃってる！？」
「うん、通じてる」
「なんで！？なんでなんだっ！！」
「落ち着け、説明してやるから」
「お・・・おっ」
「なんかボーイッシュなキャニャットだな・・・」
「しかし動物とはいえ正体をばらすのはまずいかもな・・・」
「えーと、つまりだな俺の不思議な力で動物と喋れるようにしたんだ」
「よく分からねえけど、とりあえずスゲーなお前っ！！！」
「なんでだろう、こいつがアホの子に見える。」
「とりあえず聞くんが、お前の本名はなんだ？」
「ほんみょう？」
「本当の名だ、俺が勝手にミュテってつけただろ？」
「おっ、俺の名前はミュテだぞ？」
「だからそれは俺がつけた名、俺の名前はミュテだぞ？」
「本名がか・・・？」
「おっ」
「・・・」
「わーお、なんて奇跡なんでしょう。」
「・・・すごくもなんともねえなおい。」
「・・・で、お前どこから来たんだ？」
「俺は目の前に地図を開いた。」
「ケルティスだ」
「ケルティス・・・ケルティス・・・」
「地図を見る限りそんなところはない。」
「どこかわかるか？」
「確かこのあたり・・・だった気がする」
「ミュテが指したところは・・・」

「おい待て、ここは古代遺跡の都 アーティノス だ」

アーティノスはここから少し南西の位置にある、特に何かあるよ
うなところでもないらしい(シャル談)

「あれ？確かにここだと思っただけだな」

「とりあえず、ここに向かうか・・・」

古代遺跡の都 古代とついている以上胸をときめかせざるを得
ないな。

「でもなんで俺に聞いたんだ？」

「お前見るからに野良じゃないしな、それに飼われているようにも
見えない。となると独自に文化を築いているとみた」

「うーん・・・半分当たりって感じだな」

「なら行けば答えがわかるんだな」

「なんかうれしそうだな」

「ああ、ワクワクしてきた」

謎の答えが待っている、ワクワクしないほうがおかしいと俺は思
うね。

「お前は明日のためにもう寝ろ」

「お前は寝ないのか？」

「・・・」

「なんでそんな怖い顔で睨にらんだよっ！！」

「俺の名前は 守柳 賢斗 これからは賢斗と呼べ、いいな？」

「わ、わかった・・・」

「ならよし」

俺はいまだ降り続けている雨のほうへ振り向いて番の続きをしよ
うとする

「へくちっ」

後ろからくしゃみが聞こえた。

もちろんくしゃみをしたのはミュテだ。

「体が冷えちまつたみたいだ」

そついいながらミュテは丸まって寝ようとする。

「ちよつとこつちへ来い」

「なんだ？」

俺はそついいながら近寄ってくるミュテを抱きかかえた。

「おおっ！？ なにするんだっ！？」

「これで寒くないだろ？」

ミュテを上着の懐ふくろに入れ、温めるように抱いた。

「これでもまだ寒いか？」

俺はミュテの頭をなでながらそう聞いた。

「いや、寒くない・・・むしろ懐かしい暖かさがある」

「懐かしい・・・か、もしかしたら」

そつ言おうをしたときミュテのほつを見ると寝息をたてて寝ていた。

俺は寝ている仲間を見た、そしてまだ降り続けている外へと振り向き番を続けた。

つづく

雨の日にて・・・(後書き)

眠い・・・死ぬる・・・

黒い憑きもの

気が付くと雨は止んで、太陽が東に昇りかけていた。

いつの間にか寝ていたようだ。

しかし、まだ洞窟の奥ではシャルとセシルが、俺の懐ではミュテが寝ていた。

地面には昨日シャルに教えてもらった場所が記された地図がある。

「夢じゃないんだな・・・」

つぶやくようにそう言い、ミュテを起こさないようにそっと上着ごと地面に寝せる。

そして朝の空気を吸いに洞窟から外へ出た

この世界でも朝の風は俺の世界と同じく涼しく気持ちいい。

しかし、少し違和感を覚えた。

なぜなら、鳥の声が聞こえないからだ。

この世界でも日が昇れば鳥たちは鳴きだすのだが、今は恐ろしいくらいに静寂に満ちている。

敵の姿は見えない、森と同化しているようだ。

気が付くと無意識に 蒼虎徹 の柄つかを握っていた。

そのまま刻々と時が刻まれていく・・・

先に痺れを切らしたのは相手の方だった。

クッッ

弓の放つ音がした。

それは俺の心臓に向けて撃たれていた、それは敵を一撃で倒すための至^{いた}つて普通のこと、だがしかし俺には普通なんてものは通用しない!!!

俺は飛んできた矢を刀で弾き返し、怒鳴るように叫ぶ。

「誰だ!!!」

以外にも返事はすぐに返ってきた。

「我はこの聖域を守る番人だ、旅人よ今すぐここから立ち去れ!!!」
えーあーうん、どっかで見たり聞いたことがあるイベントだな。

「D A N K O断る!!!」

俺はそう叫ぶとミュテと上着を素早く取り、遺跡の方へと全力ダッシュした、無論シャルやセルのことも考えている、そのために地図は置きっぱなしにしてきているし、敵はこいつ一人のようだから洞窟の中にいる二人を悟らせないように逃げていく。

「ななな何が起こってるんだ!?!」

流石にこつも騒いでいると起きるわな。

「すまん、今敵に襲われて逃走中」

「敵!?!」

ミュテは俺の肩から身を乗り出し敵を確認しようとする。

「くそつ・・・奴はまずい・・・賢斗、あともう少しで遺跡が見えてくると思うから、そこに逃げ込んでくれないか?」

「了解、振り落とされるんじゃないぞ!!!」

俺はミュテの言葉の通り遺跡を目指して走っていく

数分走っていくと、壊れかけた壁のような物がいくつもある場所に出た。

「ここで降ろしてくれ」

「おう」

俺は肩からミュテを降ろそうとしたとき、矢が飛んできた。

俺は咄嗟^{とつと}に抱きかかえるように庇った。

ザシュツ

「ぐっ」

「賢斗!？」

左肩に矢がかすった瞬間にミュテを抱いて壁へと転がり込む。

「大丈夫か!？」

「ああ」

そう話していると、敵は赤い信号弾のようなものを打ち上げた。

「まずいぞ、もう少しで大勢の敵がやってくる」

やはり信号弾だったらしい、しかし俺は慌てずに落ち着いて声でミュテに話しかけた。

「何か策があるんだろ？」

「ああ、すまないんだけどここで時間稼ぎを頼めるか？」

「OK、任せろ」

俺はそういうと刀を抜き、敵の前に立つ……えっ？

敵の前に立った瞬間俺は目を見張った、何故なら頭の上に俺にもエルフにも付いていないものがあるからだ、そうそれは俗にいう『イヌミミ』、「萌ええええええええ!」とつい叫びそうになった、ケモノミミ萌え属性のある奴なら夢に見たイヌミミっ娘が目の前に居る、これは「萌え」と叫ばざるを得ないのだが状況が状況なので自重した。

それと、背中に黒い何かが見える煙のような何か、完璧にこっちが本題だな……

「なんだ、私の頭に何かついているのか？」

「いや、なんか可愛いなって思ってる」

「今は冗談を言うときじゃないぞ!!!」

「冗談じゃないんだけどな」

すると彼女の後ろから大勢のイヌミミっ娘が押し寄せてきた。見る限り約30人くらい。

おまけに黒い何かが全員に見える、ただ一人を除いて。

「お待たせー、大丈夫だった？」

もうちよつと緊迫した雰囲気醸し出してくれないかなー。

「あれ？ この人、男じゃない？」

「ああ、たぶん男だと思う」

「ええ！？ 男を見るのは初めてなのですが、私たちとはずいぶん違うものですね」

ざわざわと騒ぎ出す、たしかにこの世界じゃ男は一割しかいないらしいから珍しいんだろうな。

「静まれ！！ 奴は聖域に侵入した悪人だ、我らはそれを排除するのみ！！」

「……おおー！！」「……」

隊長らしいイヌミミっ娘が掛け声をあげると他のイヌミミっ娘も掛け声をあげる。

学生運動が激化するのってこんな感じなんだろうなあと思った。
「突撃ー！！」

その掛け声とともに突っ込んでくる。

おいおい、弓兵まで突っ込んできてるじゃねえか、馬鹿かこいつらは。

しかしこの数はやつかいだな、しょうがないアレをやるか。

「ジョブチェンジ 神殿不要 ー！！」

俺の周りに粒子が集まり鎧へと変化していく。

この能力はミュテと話すために作ったパベル自動翻訳(改) を作った際に思いついた能力で、いろいろなジョブ職業 になれる歩くキッ○ニア的な能力だ。

そして俺が選んだ職業は……

「ソードマン ジョブチェンジ完了、 剣士」

もつとも 蒼虎徹 を活かす職業というわけでこの職業を選んだ。
粒子が鎧になる時間約0.5秒。

「なにっ!?!」

そりゃあ驚きますよね、普通ジョブチェンジは神殿でやるものだから。

「さて、始めるか」

刀を鞘に戻し、そのまま居合の構えのまま静かに待つ。
すると隊長らしきイヌミツ娘が笑い出す。

「はははははっ、なんだその構えは」

少しいらつとしたがそのまま構え続ける。

「お前など私が出さなくてもこいつで十分だ!?!」

そう言った隊長（ry）の横から小学5年生くらいの少女が怯えながら出てきた。

俺が言った黒い何かがない唯一のイヌミツ娘とはこの子のことだ、なぜこの子には黒い何かがないのか……。

「こいつくらいならお前でも倒せるだろう」

「でっでも」

「口答えをする暇があるなら奴を倒せ!?!」

こいつらが不良といじめられっこに見えてきた。

黒い何かにとり憑かれると好戦的、というか自己中心的になるのか。

「すつすみませんが、貴方を倒させてもらいます!?!」

涙目で言われてもなあ……。

「やああああ!?!」

剣を振りかざしながら走ってくる、すげえ転びそうだな。
少女が目の前まで来ると俺は思い切り剣を横に引き抜く。

「守柳流剣術奥義 居合一ノ型 刀斬り」

ガキイン！！

鞘に刀を収めながら少女の方を見ると、少女は折れた剣を見て驚いていた。

「無用な殺生はしない主義なんでな」

「そう言いながら少女に近づいていく。」

「ごめんなさい！！ごめんなさい！！」

そう謝り続けていた少女の頭に俺は手を乗せ、優しく話しかけた。

「ここは危険だからあそこの壁に隠れていてくれないか？」

「はっはいつ」

これで心置きなく戦える。

「さてと、死ぬほど怖い体験をしたい奴は前へ出る！！」

「あいつ程度に勝ったくらいで調子に乗るな！！」

そう言ったのはもちろん隊長（ry、後ろからは一般兵らしきイヌミミっ娘達が前へ出てくる。

前へ出てきたのは残っていた全員、ミユテの策とやらはまだなのか・・・正直めんどくさい。

「いつちよここらでキメるか。」

俺は鞘を握りながらイヌミミっ娘たちへと走り出す。

「おとなしく捕まる気にもなったのか？」

「おとなしく捕まる？ はて何のことやら」

「そう言い、そいつらの合間を縫うように走る。」

「早くそいつを捕まえる！！」

「まだ気づいてないか」

「なにっ!?!」

「風の刃に切られたのを気づくころには時、既に遅し」

「何をいつて!?! ガハッ」

「イヌミミっ娘達が一斉に倒れる。」

「安心しろ、刀背打ちだ」

刀での最強の攻撃 居合切り を走りながら敵に切りつけること

によって敵は切られたことに気が付かない、気づいた時にはもう息の根はないだろう。

「ふむ、かまいたち鎌鼬 とでも名付けようか」

おおう、すげえ技名がしっくりくるな。

そう考えていると背後から声がした。

「動くな!!」

「まだ動けるやつがいたか?!」

そう言い放ち後ろを振り向くと壁に隠れていた少女に短刀を突きつけた隊長（ry）がいた。

黒いGなみにタフだなこいつ。

「なんて卑怯な・・・」

「戦いにズルも卑怯もねえんだよ!!」

くっ・・・手が出せない・・・

「武器をしまつてこっちにくるんだ」

「しょうがない・・・セービング武器収納」

蒼虎鉄 が粒子状になりおれの手元から消えていった。

この魔法は リロード武器召喚 で出した武器などを武器界へと転送する魔法だ、詳しくは知らないが武器界っていうのは武器が擬人化している世界らしい、あと武器が粒子状になってわけじゃなくて転送する際に同じ質量の粒子が武器と同じ形状で転送されるため粒子化したように見えるって訳だ、以上専門用語解説のコーナーでした！。

俺はおとなしく隊長（ry）へと近づくと、そして拳を握り飛び込もうと踏み込んだ瞬間・・・

ズキッ

「っ!?!」

スイーヴァ村の時と同じく、激しい頭痛が俺を襲う。

「また・・・か・・・」

すべての音が遠のき、視界が歪む・・・

カチャッ

またあの時のように頭の中で鍵が開くような音がした。そしてまた記憶の1ピースが当てはまる……

「スキありい!!」

「しまっ……がっ」

頭痛で気が遠のいた一瞬のスキをつかれた。

うつむいていた俺の後頭部に衝撃が走り、そして記憶は途切れる

目覚めると石でできた牢屋にいた、見た限り何も無い。

「まったく、後頭部を鈍器で殴るか普通……」

相変わらず後頭部には傷はない、どれだけ丈夫なんだ俺の身体。

「あーまったく、やってらんねー」

そう言っ壁にもたれかかる、まずここはどこだ……

「大丈夫なの？」

壁越しに隣の牢屋から少し幼さを残した声女性の声が聞こえてきた。

俺の独り言を聞いてたらしく、心配してくれているようだ。

「ああ、俺は頑丈なもんでね」

「そうなんだー」

「まったく、手荒な歓迎だ……」

俺は苦笑しながらそう話した。

「あなたはなぜ捕まったの？」

「よくは解らないが、聖域とやらに侵入した悪人と認識されたらしい」

「まったく、あいつらは自己中過ぎなんだよ」

「ははっ、その通りだな」

確かにあいつらはジャイ○ニズムを持つガキ大将よりもたちが悪い。

「じゃあ、貴方はどうして捕まっただ？」

俺は彼女に聞かれたことをそのまま聞き返した。

「今日、朝の散歩してたら捕まっただの」

「えっ・・・そんなことで？」

「うん、こんなことで」

数十秒の沈黙・・・

え、なに？ ただ道を散歩してただけで捕まるの？

「はぁ・・・」

俺は今までで最も深いため息をする。

「あきれちゃうんだよね？」

なんなの？ 最近のジャ○アンでもまだいいやつだぞ？

「もし、ここから出れるとしたら貴方は何をしてみたいと思う？」

俺はよくこの状況でするような質問を彼女にする。

「えーとね、いろいろなことをいっぱいするんだよ」

「いろいろなこと？」

「たとえばね、長老様にはするなって言われてるけど旅とかしたいんだよー」

「じゃあ、俺が連れて行ってやるよ」

「ほんとに!？」

「ああ、実は俺は仲間と旅をしているんだけど、はぐれちゃってな」

「あはははー」

笑うことないだろうが。

そう雑談していると、がちゃっと地上へと通じるドア（多分）が開いた。

すると、あの時の少女がこそこそしながら入ってきた。

「・・・なにしてた？」

そう言った俺に向かって自分の口に人差し指をあて「しーっ」と

言った、この世界にもそれあるんだな……。

「……で、何しに来たんだ？」

「お兄ちゃんにこれあげようと思って……」

そういつて取り出したのは果物のようなもの。

「朝から何にも食べてなかったから助かるよ」

そう言いながら俺は果物を頬張る。

ぐううううううううう

聞こえてきたのは壁の向こう。

「あはははー実は私も朝から何にも食べてなかったりして……それを聞いた俺は少女に果物を一つ渡してこう言った。

「この果物をお隣さんへ渡してくれないか？ 引越してきたからご近所さんへの引越そばの代わりとしてな」

「引越そば？」

「俺の国じゃ、引越した時には蕎麦そばって言う実で作った麺を隣の住人に送る風習があるんだ、その代わりに果物をな。まあここに住み着くわけじゃないけど」

「面白い風習があるんですね」

そう言つて少女は隣へと果物を持っていく。

「そついや名前言つてなかったな、俺の名は 守柳 賢斗 だ」

「私は ワーナ・シュトレーゼ と言います」

「私は ソウ・クリムゾン なんだよー」

聞いたのはワーナの方なんだけどなー。

て言うか蒼ソウなんだか紅クリムゾンなんだかどつちなんだ。

「賢斗さんは旅人なんですか？」

ワーナが聞いてきた、そついや言つてなかったな。

「そつだが……実は旅人というのは世を忍ぶ仮の姿だ」

「「ええっ!？」」

「本当は勇者なのだ!！」

渡り人と勇者は少し違うけど、邪神を封印したところは勇者と同じだけな。

「この世の悪を倒すために旅をしているのだ!!」

ふははははと高笑いしながらそう言った。

「でもでもっ、お姉ちゃん達は悪くないんですよ……」

「それはどう言うことだ？」

奴らが悪くない？ あの自己中には理由があるのか……？

やっぱりあの黒い何かか……

「一昨日くらいからね、お姉ちゃん達がおかしくなっちゃったんです……」

あの黒い何かにとり憑かれたと考えていいな……

けどここらへんじゃ物にとり憑くのは居ても生物にとり憑くほど

の魔力を持った奴はいないはずだが……

「そうか……なら助けなくちゃいけないな」

俺は頭を押さえながらそう言った。

「でも、どうやって……？」

「俺の勘じゃ、もう少しで……」

俺がそう言った瞬間

ドゴオオオオオオオ!!

と上から破壊音がした。

「おーきたきた」

俺はのんきにそう言う。

「そんなに落ち着いてていいの!？」

「そうだな、俺も動き出すとするか」

俺は右手を手刀の構えをして力を込める。

「ワーナ下がってる」

「う、うん」

「守柳流手刀術 満月斬り !!」

石でできた柵に円形に穴が開く。

「この物件は非常に住みにくいから、引越すか」

「ソウもそう思うだろ？」

なんかシャレっぽくなつたがわざとじゃないから、うんマジで。

そんなどうでもいいことを考えながら隣の牢屋の中を見る……

うえ？

「お前……妖精フェアリーだったのか……」

牢屋の中にはカゴがあり、その中に体長約10？の赤い妖精が座っていた。

「実はそうなんだよねーたはは」

「まあいい、行くぞ」

俺はソウの居る牢屋と檻の柵の両方を手刀で斬り穴をあけ外へと通じるドアで外へ出る

外へと出ると高い塀に囲まれた村の中央にネコミミの女性がいた。ネコミミの女性は俺を見つけると俺と背中を合わせるように後ろに立った。

「おう、賢斗助けに来たぜ！！」

「遅いぞ、ミユテ」

「私がわかるのか！？」

「まあな、お前も気づいてたんだろ？」

「ばれちまってたか」

緊迫した雰囲気の中で俺たちは笑いながら言葉を交わす。

「まずはこいつらをどうにかしないとな」

「ああ、でも賢斗こいつらなんかおかしいぞ」

「よく分かるな、こいつらは何かに操られているから気絶させる程度でやれ。いいな？」

「分かったぜ、我が飼主^{マイ・マスター}」

「シャル、セシル聞こえているな？」

「聞こえているよお兄ちゃん」

「私も聞こえているわよ」

屋根の上からシャルの声が、俺のすぐそばからセシルの声がした、しかし見回す限りセシルの姿はない。

「透明化魔法^{インウェイシブル}か」

セシルのジョブは魔法使い^{ウィザード}、魔法は基本的に魔力を安定させるために呪文を唱え魔法陣を描くため時間がかかるそのため隙ができる、普通なら前衛を剣士などに任せ後衛で魔法を撃つのが普通だ、しかしもし前衛がない場合はどうするか、それは『姿を消し不意を打つ』これが最も効果的な攻撃方法、その姿を消す魔法こそ透明化魔法^{インウェイシブル}、名前そのまんまだな……。

多分今回はミュテが前衛として機能しないと買ったんだろうな……。

「じゃあ、派手に暴れるとするか……」

「神殿不要^{ジョブチェンジ}」

「剣士 から派生、その名も 侍 ……でござる」

粒子が形成したのは、パーカーとズボンを剣道着風に作ったもの、防御力は期待できないがかなり動きやすい使用になっている。

あと最後につけた『ござる』はこの世界じゃ流石に分からないか……。

「えーと、危ないんで死ぬほど痛い目に会いたくない人は家の中に入ってて下さいね」

そうのんきに忠告し、俺は刀を抜く。

「シャル、セシル援護を頼む、いくぞミュテ」

「暴れるぜえー!!!」

そう言っただけとミュテはイヌミミっ娘達に飛び込んでいく。

「はあっ!!」

俺は刀背打ちで昏倒させていく。

「せええい!!」

ミュテは首筋に手刀を当て昏倒させていく。

「我が光はすべてを夢へと誘う」

シャルは ミラー・ジュ・ヴァル 導きの光 を駆使して眠らせていく。

「精霊の粉はすべてを夢へと引き込む」

セシルは スリープ 誘眠魔法 を使い眠らせていく。

五分後にはイヌミミ達は地面に倒れ、その中で俺たちが立っていた。

「さて、この黒いのを診させてもらうぞ」

俺は記憶を思い出した時に出てきた能力を使う。

トウリ・ヴァ・シン
「真眼!!」

右目に少し違和感を感じる。

「その眼は・・・!?!」

・
・
・
ミュテが驚いていた、まあそりゃそうだなこの能力を使ったら・

「これ使うと右目が赤くなるんだよな」

そう、俺の右目は灼眼・・・もとい朱眼へと変化している、これは真実の神 トウリア と契約を交わし真実を知る力を得る代わりに寿命を削り、目が トウリア を象徴する赤の色へと変化する。

神と契約を交わすのは簡単じゃない、寿命は精霊の5倍は多く削られるし目の色が変わること以外にも手足や体に変化することもあ
るらしい。

しかし、俺は幼いころに寿命を無限に伸ばす フロー・ファン 無期限延長 を万
物の創造主で作ったため寿命なんて気にしなくてもいい、つーか万
物の創造主ってチート能力だよな。
リエイター
リエイター

「これは・・・まさか・・・」

俺はこいつらの黒い何かを診ていて驚愕してしまった。

「どづしたの?」

心配そうにシャルが俺の顔をのぞいてくる。

「最悪だ……」

まさか……奴が復活したのか!?

「この黒いのは……マオーの邪煙だ」

邪煙つていうのは魔力の残り香のことで、ある程度『魔学』に関する知識がないと見れない、しかも大抵が危険な怪物や魔人ものだ。

「マオーつてまさかあの!？」

そりゃあ驚くだろうな、マオーといえば一人しかいない

「ああ、異世界の渡り人の伝説に出てくるあの邪神マオーだ」

「……ざわざわ……」

家に隠れていた住民たちが騒ぎ出す。

「しかし、このままじゃこいつらも危ないな」

邪煙は人にとり憑くと好戦的にし魔力を吸い続ける、魔力が吸い尽くされると最悪の場合とり憑いた物に死をもたらす。

「でもどうやってこの強力な邪煙を浄化するの?」

「渡り人の能力を使うしかないな」

俺は右腕を胸の前に出し、呪文を唱える

「我が血に宿るは紅きに染まる竜の息吹、 異世界の渡り人の名
においてその魔力ここに解放せん」

すると手首に紋章が現れ、右手に炎が灯る。

「聖なる炎は邪悪なるもののみを焼き尽くす」

右手でイヌミミっ娘達の頭をなでていくと、イヌミミっ娘達が炎に包まれていく。

「ん……ここは……」

「気が付いたか」

「つて燃えてる!？」

「でも熱くないだろ?」

「確かに……」

最初に気が付いたのは隊長（ry）さすが黒いGなみにタフなだけはある。

「えーとあれ？ 確か私たち黒い影に飲み込まれて……」

「黒い影？」

「ああ、少女のような形だった」

「少女の形か……」

謎は深まるばかりだ……

しかし解いて見せよう、じっちゃんの名に……おっと、げぶんげぶん。

「お姉ちゃん！！」

そう叫んでワームが隊長（ry）へと走っていく。

「おねえちゃん……」

「ワーム！！ お前は無事だったのか！？」

そう言って二人とも抱きしめあっていた、仲間愛ってイイヨネ！！

「で、ここはどこなんだ……」

「ここは アーティノス だよ、お兄ちゃん」

シャルが俺にそう告げる。

「え……まじで？」

「うん、マジで」

「ここが例の古代都市？」

「うんそうだよ？」

周りを見渡す、確かに古代都市っぽい。

「じゃあ、ここから ケルティス は近いのか？」

「大体30分くらいだね」

「ちなみに俺たちが居た洞窟からは ケルティス へはどのくらいだミユテ」

「大体5分くらいだ」

「おい、それって俺が走った時間よりも短いじゃねーか」

「……あ」

こいつはアホの子認定だな、どこに申請すればアホの子って認定

してくれんだ？ 文部科学省か？

「じゃあ、ケルティスに行くか、シャル・セシル・ミュテ・ソウ行くぞ」

「え・・・私も・・・？」

「言っただろ、旅に連れてってやるって、まあお前の村までだけだな」

「ありがとー！！」

そう言っただけの腕に抱きつく。なんか不思議な感じがするな、これ。

「ワーナから話は聞いたよ、私の名は シーナ・シュトレゼー ワーナの姉だ、君には世話をかけたようだね」

隊長（ry）が俺に話しかけてきた、ワーナとは姉妹なのかならさつきのを姉妹愛と訂正しておくか。

「気にするな」

「君に聞きたいんだけど・・・その右手は何なんだい？」

・・・そういえば忘れていた、俺は燃え続けていた右腕に魔方阵を描き、炎を封印する。

「ワーナとソウには勇者って言ったけど、実は俺 異世界の渡り人なんだ」

「まさか・・・あの！？」

「そうなんだよな」

苦笑しながら俺はそう言う。

「ワーナ元気だな」

俺はワーナの頭をなで、アーティノスからケルティスへと向かうために門へと向かう。

「またねー、渡り人のお兄ちゃん」

後ろを見るとワーナが手を振り見送ってくれていた。

「おう、またな」

俺はそう言い、ケルティスへと歩き出した。

ケルティスへと向かう俺たちの上で太陽はこれでもかと輝いてい

た。

く

黒い憑きもの(後書き)

ども、心眼です。

今回の話は今までで一番文字数が多いですね。

憑かれ・・・疲れますよこれだけ長いと・・・

次回は・・・未定ですはいwwww

また次回会いましょう!!

(-.-)ノシ

古代の都市に眠りし者

アーティノスからケルティスへ移動し始めて約20分、現在丘に登っている。

「あともう少しで俺の村に着くぞー」

「少し待てミュテ、あいつらが着いてこれてないぞ」

俺は後ろで息を切らしているシャルとセシルを指さす。

「ここらで休憩しないか？」

「しゃーねーなー」

ミュテの了解を得て、ひと休みすることにした。

「二人とも体力ないんだねー」

「「貴方（貴様）は賢斗（お兄ちゃん）の肩に乗ってるから楽でしょうね（だろうな）！！」

二人ともソウに文句を言えるほどの元気はあるようだ。

「ほら、水だ」

「ありがとーおにいちゃん」

「ありがと」

俺は水をシャルとセシルに渡す、そういえばこいつら後衛型のジヨブだから体力ないんだな。

そう思っていると、そつと風が緩やかに丘を吹き通る。

「いい風が吹くな・・・」

こうしていると何も異変がない平和なところだと感じる、だがこの世界に危機が迫っているのは確かだ、それは俺がこの世界に来たことと関係あるのか・・・？

「・・・この匂いは!?!」

ミュテはそう言い丘の上へと走り出す。

「ちよっ・・・待てよ!?!」

「急に動かないでよー」

俺は肩にソウを乗せたままミュテを追いかけて走り出す。
丘の頂上から見えたものは

ゴーレムによって破壊される古代都市。

その中では人々が逃げ惑っていた。

ここから走っても間に合わない・・・どうすれば・・・そうだ、
あの職業ジョブをつかえば!!

「ミュテ早くあそこへ向かえ」

「賢斗はどうするんだ!？」

「俺はここから狙う撃つ」

「でもここからじゃ弓は届かないぞ!」

「いいから早く行け」

そういつとミュテは古代都市へと走り出した。

「そう、それでいい・・・」

「賢斗、ここからじゃ本当に弓は届かないよ、どうするの?」

ソウは俺の肩から自分の羽で飛び、古代都市を見ながらそう言う。

「まあ見てろって、ジヨブチェンジ!」

粒子は俺の全身を包み、今回は鎧にならず特殊な服へと変化する。

「銃ガンナー使い から派生、狙撃者スナイパー」

なんか蛇の名を持つ男っぽい服装になった、今ならどこへでも潜
入できそうだ。

「武器リロード召喚」

俺がそう言うくと手に粒子が集まり狙撃銃が現れる。

「なにその武器、かっこいい!!」

そっぴいこの世界じゃこんな武器はないのか。

「ドラグノフか、使うのは初めてだが・・・」

バ〇オらとレ〇の見よう見まねだが、やってやる!!

「狙い撃つぜ!!」

俺はそう言い、股を広げ右足の膝と両足のつま先の三点で体を安

定させ、銃を構えスコープを覗く。

ゴーレムの結晶^{コア}は左肩・・・集中しろ・・・ここだ！！
「まずは一つ・・・」

バンツ！！

発砲音が響き、見事に肩を貫通しゴーレムが崩れ落ちる。

「おお〜！！！」

ソウが歓声を上げる。

「次は頭・・・」

バンツ！！

これも見事に当たり、崩れ落ちる。

「おおお〜！」

「左肩・・・右脇腹・・・左太もも・・・右鎖骨・・・」

バンツ！バンツ！バンツ！バンツ！

すべて吸い込まれる様に当たり、ゴーレム達は崩れ落ちていく。

「おおおお〜！」

「これでラストオ〜！」

バンツ！

そう言い、ゴーレムの心臓部分に撃ちこむ。

「ミッションコンプリート」

ゴーレムが崩れるのを確認し、スコープから目を離して能力を解除する。

「賢斗かつこいい〜」

ソウは俺の肩に乗り直し、そう言った。

「何かあったの？」

そう言いながらシャルとセルが俺の方へと走ってくる。

「お前ら気づくの遅すぎだ」

俺の言葉に二人は不思議そうな顔をするのに対し、俺は「はぁ・

・」と嘆息する。

「いいから早く行くぞ」

そう二人に言い古代都市へと向かい、走り出だした

古代都市やゴーレムの瓦礫が散乱している中、ミュテは村人たちの人数確認をしていた。

「おーい、ミュテー」

「おお、賢斗」

「お前は大丈夫だったか？」

「俺をなめんじゃねえぞ」

どうやら大丈夫のようだ、だが古代都市のほうはポロポロに崩れ住めそうにない。

「ここを俺が直しやる。それと俺を助けた事とで貸し借りはゼロだ」

「直す！？ そんなの無理だろ！！」

「俺に不可能なことなんてほとんどないぜ？」

俺はそうミュテに言い、古代都市全体が入るほどの大きな魔方陣を描き、呪文を唱える。

「すべての大いなる母である 時 よ、神のみぞ触れられる汝を我

守柳 賢斗 の名において、神をも凌駕する力により汝に触れ、

私の望む方向に時の流れを変えん」

「ツァイメ・モジューカ 時間変化魔法、対象は古代都市ケルティス！！」

魔方陣が輝き古代都市の時間が巻き戻っていく。

「これくらいでいいな」

俺がそういうと時間が巻き戻るのが止まる。

「懐かしい風景だ」

俺はスイーヴアのとくと同じく昔ここを拠点にしていた。

その時見た風景の通りに遺跡は戻っていた。

「これって昔のケルティスじゃねーか!!!」

俺が知ってるケルティスってこの風景だけだからな」

「おお!!! 老朽化で壊れたの地下への扉もあるじゃねーか!!!」

この扉って地下に通じたのか、知らなかったな!」

「おにいちゃんまさか記憶が?」

「ああ、ばつちり思い出したぞ……一部だけ」

なんで一部だけなんだよお!!!

もう全部でいいだろ!!!

この先も一部分だけだったら何年かかるか……

「おにいちゃんの記憶が全部戻るまでシャルと一緒にいるからね!」

「その言葉だけでも俺は嬉しいよ……」

そう言いながら俺はシャルの頭をなでる。

「えへへー」

シャルをなでていると自分もとセシルとミュテが決意を告げる。

「俺だつてついて行くぜ!!!」

「私もついて行くわよ?」

お前からつてやつあ……

なんか感動してしまった。

俺の世界じゃそんなこと言ってくれる奴は居るな……5

人くらい。

そついや俺の世界にも俺のことを気にかける人っていたんだな……

大切なものは無くして初めて気づくか……全く……その通りだな。

ふっ、と鼻で軽く俺は俺自身を笑う。

「つたく、俺は何にも気づいてなかったんだな」

「え？ なんのこと？」

「シャルには関係ないことだ」

「気になるー」

「また今度話してやるよ、そういえばあの扉って開くのか？」

そう言っただけ俺は話をそらす。

「開くとは思わう……」

「どういうことだ？」

「俺はあの扉が開くところを見たことねーんだよ」

俺は地下への扉の周りを調べてみる。

すると、土に埋もれている岩の彫刻を見つける。

「これは……楽譜か？」

よく見ると5本の線があり線の上や間に丸が彫られている。

俺はおもむろにシヨルダーバッグに手を伸ばすしぐさをするが手

ごたえはない。

「あーそっぴやカバン盗られてたんだっけ」

ってことはアーティノスにあるのか、取りに戻るしかないか……

・

「カバンってこれか？」

ミュテが持っているのは長老からもらったシヨルダーバッグ。

「おお、それだ」

俺はミュテからカバンを受け取ると、封印札を一枚取り出す。

「解放」

そう言うと封印札からオカリナが出てくる。

「それは……」

ミュテは驚いた顔でオカリナを指さす、やっぱり覚えてるか。

「お前とナルクから貰ったオカリナだからな、大切にしているよ」

そっぴや……ミュテと一緒に拾ったウォルフの名前はナルクだ

つたな。

「そういえばナルクの姿が見えないようだが？」

「・・・お姉ちゃんはずっと前に旅に出たんだぜっ」

ミユテは寂しげな顔をする、その顔は 真眼 の能力を使うまでもなく嘘をついていると分かる。

おそらく行方不明になっただか・・・もしくは死んだか。

「そうか、元気にしているといいな」

俺は作り笑顔をして答える。

「さて、始めるぞ」

俺は強引に話を変え、岩に彫られた楽譜の通りに音を奏でる、すると扉が開いていく。

すべて奏で終わると扉は完全に開き動かなくなった。

俺はオカリナを封印札ジュエライドに収納する。

「さてこの奥には宝があるか・・・怪物がでるか・・・楽しみだな」

冒険という言葉の響きに胸が躍らない男なんかいないぜ！！

レアアイテムハンターの血が騒いできたあ！！

「神殿不要！！」

今着ている服では動きづらいという判断をした俺は能力を使い服装を変えることにした。

今回も粒子は鎧にならずに服へと変化する。

「トレジャーハンター 冒険者 ！！！」

頭にはインディキヤップ、腰には鞭がついており、服装はだらしなく、ぶかぶかのジャケットを着ている、まんまイン・オイ・ジョー
○ズだ。

「さあ、行こうぜ！」

俺はいつの間にか持っていた松明に火を灯し、扉の奥へと入っていった

遺跡の通路は延々と闇が延びているばかりだ。

「松明を持ってきていてよかった・・・」

松明に照らされた暗闇の中でしみじみそう思う。

「松明がなかつたら今までの畏はよけれなかつたね」

ここまで壁から矢が飛び出たり、床が急に開いて落とし穴になったり、天井から丸い岩が落ちてきて数m走ったりしたが、松明があったおかげで予知が出来たためすべて回避することが出来た。

「ここが一番奥みたいだな」

通路の一番奥は部屋になっており、部屋の真ん中には大きな棺があった。

「なんだこれ？」

ミュテが棺に触れる。

「おい馬鹿、触るなっ！！」

そう言うがすでに時遅し、ミュテが触れた瞬時に棺から何かが飛び出した。

それに松明を向け照らした瞬間、目を疑った。

「まさか怪物が眠っていたとはな」

その怪物は上半身は女性の体をし、下半身は大蛇の体をしていた。ゴルゴン三姉妹のメデューサに似ているが、髪の毛が蛇じゃないことやあいつが今睨んでいる俺が石化しないところを見ると違うみたいだ。

「古代の亜人種かなにかなのか？」

亜人種っていうのはミュテのような獣人などのモンスターに近い人のことを言う。

「我はこの場所で新しき主を待つものナリ、主ならばすべてを震わせてみよミュ」

すべてを震わせる・・・？

なぞなぞは得意なのだがこれは流石に分からないな。

「震わせる・・・地震か？」

「すべてとは風、海、人をも指す言葉ナリ」

「風、海、人・・・震わせる・・・空気の振動・・・音が！」
よくそこに繋がったな。

しかし考えてみれば遺跡の扉を開けたのはオカリナの音、要するに空気の振動で動くしかけだった。

俺は松明をシャルに渡し、オカリナを出してスイーヴァ村で奏でたあの曲を奏でる。

「この曲は・・・渡り人へ送る歌」
ルウ・シ・ディケル

よく知ってたなミュテ、てかそんな曲名だったのか、親父に習った曲だったが渡り人に関係ある曲だったとはな。

「おお、懐かしき音！！　すべてが震えてイル！！」

一通り曲を吹き終わると彼女はとぐるを巻き、俺に頭を下げる。

「貴方こそ私の主になるべきモノ、私は貴方の下僕となりマス」

「おにいちゃんどうするの？」

「決まってるだろ、仲間にする」

俺は基本的に来る者は拒まない、て言うか拒む理由がない。

「でもその姿じゃなあ・・・」

頭から尾の先まで目測で5m、流石にそれじゃ目立ちすぎる。

「大丈夫デス」

そう言うつとみるみる小さくなり最後には体長1mくらいの蛇になった。

「これでよろしいでしょウカ？」

「上出来だ」

そう言うつと蛇を持ち上げる、すると蛇は腕に絡みついてきた。

「そっぴや名前を聞いてなかったな」

「私の名は　メデューサ　と言われてまシタ」

何でこっちの世界の怪物の名前を付けられてるのかなー？

なんでだろう、偶然じゃない気がする。

「一つ聞くが・・・お前の前の主の名前はなんて言うんだ？」

恐る恐る聞いてみる。

「確か　守柳　大悟　デス」

「……やっぱり偶然じゃなかった。」

「それ……俺の父さんだ……」

名前の付け方が半端なく単純だあ……

もうちよつとひねってくれよ……

「すごい偶然でスネ」

「ソウダネー」

父さんの手がかりが見つかったけど、手がかりとは言えないよなこれ。

「とりあえず上に戻るぞ」

落胆しながら来た道を戻っていく……

「来た道を戻るって結構難しいよな……」

落とし穴の罠はロープを使って越えていかなければならないし、壁から矢が出てくる罠は矢が切れない限り動きつ続ける。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「なんだ……この音は」

ドゴオツ!!

天井から丸い岩が落ちてきた、そしてお決まりのパターンに……

「石は一つ限りが相場だろおおおおおおお!!」

球状の岩に追いかけて登って来た道をまた戻る破目になっている。

地上へ戻るのにはもう少しかかりそうです、ハイ。

U
U
U
U

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5079s/>

俺の異世界旅行記

2011年11月13日22時47分発行